



「ありがとう」って、声をかけてもらえるだけで、頑張れるんです。

橋本 由香里さん (船引町声沢在住)

今も都路町の皆さん、市外からは大熊町など双葉郡の皆さんが避難所で生活しています。※6月20日現在
●旧春山小学校…(都路町の皆さん140人)
●船引就業改善センター…(双葉郡の皆さん34人)
仮設住宅の建設も進み、避難所から徐々に移動されています。

(采) ここに避難されている皆さんは、震災前は農業やゲートボールしていた人がたくさんいます。今までできたことが、できなくなっってしまった現実にとてもストレスを感じていると思います。一日も早く、元通りの生活ができる日が来てほしいと思います。(談)

(田) ただ、一日も早い事態収束を願うばかりですね。

―(原発など)未だ先行きが不透明な状況ですが?―

(采) 顔を覚えてもらったり、声をかけてもらえる。ボランティア仲間とも打ち解けてなんでも言い合えるようになって(大切な仲間ができた)。大きなやりがいを感じます。

(田) 市民の皆さんからの感謝のこぼれに尽きます。ありがとうございます。救われます。正直、調子の悪かった時もありがとうと言われただけで、頑張れました。

のとは何ですか?

(采) はい。震災から1週間後から、参加。総合体育館には大勢の皆さんが避難していて驚きました。子ども教育ボランティア、傾聴などに携わっていました。避難所が変われば、当然雰囲気も変わります。旧春山小の皆さんは団結しているし、炊き出しも頑張っています。仕事の合間をぬってなんとか続けています。

―活動を支えてくれるも

震災発生直後から、いただいている数々のご支援。全国各地から物資や義援金にとどまらず、自らの仕事と両立しながら、避難所などでボランティア活動をしてくださるかたが後を絶ちません。震災から3カ月が過ぎ、避難されているかたへの仮設住宅整備が進むなか、旧春山小学校で活動されているお二人のボランティアにお話をうかがいました。

(インタビュー・記載内容は6月15日現在のもので)

―お二人とも地震が発生した時はどのような状況?―

采さん(以下、采) たまたま休暇で自宅にいました。激しい揺れに経験したことのない恐怖を感じました。

由香里さん(以下、由) 発生当時、郡山駅にいたのですが帰宅難民になり、列車が止まり40分歩いて友人宅

―現場でのご苦労は?―

(由) センター発足当初はとまどいもありました。役割が明確でない、全国各地から来るボランティアとの役割調整などに苦慮しましたが、日々状況は良くなり、前に進んでいる感じがします。

―ボランティア参加は初めてでしたか?―

取り戻したい。

一日も早く、皆さんの笑顔を取り戻したい。

災害ボランティアにきく。



ボランティアは、いつまでも続けられるよ……。この一言で目が覚めました。

橋本 栄さん (郡山市中田町在住)

に宿泊。翌日、親に迎えに来てもらうなど、大変な思いをしました。

―災害ボランティアを始めるきっかけは?―

(采) 「よさこい」仲間が田村市総合体育館で炊き出しボランティアをしたと聞き、自分にもやれることはないかと考え、ボランティアセンターに登録しました。本業との兼ね合いがあつ

て、少しずつ参加していましたが、他県などにボランティア仲間(九州など)ができ、大いに刺激を受けました。

「ボランティアはいつまでも続けられるよ」この一言で、目覚めましたね。自分ができる範囲で活動を続けています。メンバーにも恵まれ、日々勉強という感じはあります。

(田) 休職中だったので、自分が役に立てることがない

